様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０２０６

研究課題名（和文）近代ドイツへの『国富論』導入をめぐる経済思想史的研究

研究課題名（英文）The Introduction of Adam Smith's Wealth of Nations into Modern Germany

研究代表者
大塚　雄太（OTSUKA, YUTA）

名古屋大学・高等研究院（経）・特任助教

研究者番号：７０５４７４３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツの啓蒙思想家クリスティアン・ガルヴェ（1742-1798）による、アダム・スミス『国富論』のドイツ語訳の経済思想史的意義を明らかにした。加えて、『国富論』翻訳の背景を構成するガルヴェの近代社会論および道徳哲学の詳細を明らかにするとともに、当初の研究視角を拡大し、ひろくヨーロッパにおける近代思想の展開過程を追跡することによって、ガルヴェの思想的所産を、その学際的特性を損なうことなく思想史の文脈に位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：This research examines the German translation of Adam Smith's Wealth of Nations by 18th-century enlightenment philosopher Christian Garve, and shows the significance of this event for the history of economic thought. The research also investigates Garve's own work on modern German society and his moral philosophy, which constitutes the background to his translation, as well as discussing the process of development of enlightenment philosophy in Europe. As a result, the meaning of Garve's ideas and his various translations are newly positioned within the context of the history of thought without damaging the interdisciplinary nature of his work.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：通俗哲学　ガルヴェ　道徳哲学　スミス　ファーガスン　啓蒙絶対主義　フランス唯物論　文明化と貧困

１．研究開始当初の背景

(1) 近代ドイツに生成した社会認識について、わが国では主として経済学史および社会・経済思想史分野からの接近がなされてきた。だが啓蒙期の研究は必ずしも十分に進展しておらず、経済学史分野について言えば歴史学派およびリスト以前、思想史分野について言えばヴォルフ以降カント以前に空白が目立つ状況であった。

(2) 18 世紀ドイツの啓蒙思想家、クリスティアン・ガルヴェは、経済学史分野では『国富論』のドイツ語訳者として、思想史分野ではカントの論敵として知られてきたが、彼自身の著作と翻訳作品の詳細が問われることはきわめて稀であった。ガルヴェの思想家像が学史分野と思想史分野でまったく異なることからも明らかなように、学際的要素を多分に有する彼の思想的所産を評価する方法的視点の欠如によって、彼への言及はつねに断片的なものに止まってきた。

(3) 学史研究・思想史研究の空白とこれまでのガルヴェに関する断片的評価とを重ね合わせることで課題は明確なものとなった。つまり、ガルヴェ自身の著作および翻訳作品における彼の社会認識を問い、その詳細を明らかにすることは、近代ドイツにおける社会認識に関する研究史の空白を埋めることに十分に寄与するだろうということである。ガルヴェは近代思想の最重要作品の多くを翻訳した人物であり、その影響力はきわめて広範に及んだため、ガルヴェの思想史上の功績は相当大きなものであったと考えられる。

(4) ガルヴェの思想に関する研究は、ドイツにある程度の蓄積があるが、90 年代以降停滞している。したがってガルヴェの思想史への位置づけは、国際的な研究状況においても喫緊の課題である。

２．研究の目的

上述のとおり、本研究課題はガルヴェを軸として近代ドイツにおける社会認識の一端を解明しようとするものであるが、対象はあまりに大きく、したがって次のような限定が必要である。

(1) スミス『国富論』のガルヴェ訳の特質を析出することによって、『国富論』のドイツ的受容形態を明らかにする。

(2) ガルヴェの近代社会論を分析することによって、彼の社会観を明らかにするとともに、翻訳に際しての原著解釈を引き出す。

(3) ガルヴェの理論的基礎としての道徳哲学の初期形態を解明する。

ただし、本研究課題はガルヴェについての個別研究を中心に進めながら、18 世紀的学際性に根ざし、従来の人文系と社会科学系の研究蓄積をともに活用しつつ、近代ドイツ思想史の新水脈を模索するという大きな狙いをもつものでもある。

３．研究の方法

(1) 『国富論』のオリジナルとガルヴェ訳の比較対照を行う。商業社会の先進的社会像が、翻訳する中でどのように解釈され、表現されているのかを析出する。

(2) 翻訳を思想的所産とみなす場合、その独創性を問うにあたって言語的置換の詳細を追跡するだけでは不十分であり、それを補填する原著解釈を思想家自身の著作から引き出す必要がある。ガルヴェが後進国といわれた当時のドイツ社会をどのように把握し、展望していたのかという点を解明するには、市民以下の諸階級に着目した社会論の分析が有益であろうと考えられる。

(3) スミス研究において道徳哲学と政治経済学との関係が問題となったように、イギリス道徳哲学から影響を受けたガルヴェの道徳哲学と、彼の近代社会論における人間理解の関係性もまた問われねばならない。代表者のこれまでの研究蓄積を基礎として、ファーガスンの『綱要』の翻訳を題材とし、ガルヴェの道徳哲学の初期形態を解明する。

(4) 海外における主要研究者とコンタクトを取り、本研究課題についての意見交換を行う。とりわけパリ第 8 大学の N.ヴァシェック教授との意見交換が重要である。また国内に不足する一次資料についてはドイツの図書館において資料収集を行い、分析を進める。

４．研究成果

本研究課題は、スミス『国富論』の独訳分析とガルヴェの近代社会論・道徳哲学分析の二本柱により構成されるものであったが、後者の課題については当初の計画以上に進展させることができた。近年、わが国において『国富論』のガルヴェ訳そのものの存在と意義は、比較的広範囲において認知されるところとなったが、その背景となるガルヴェの近代社会論分析は、依然として十分な進展をみていなかった。

そうしたなか、本研究は、ガルヴェの近代社会論の分析対象を当初予定していたよりも大きく拡大し、ドイツにおいても十分に扱われなかったものを含む大小様々な著作分析を行い、『国富論』の翻訳の背景を構成する彼の近代社会観の具体像を明らかにすることによって、研究史上の弱点を克服することに大きく寄与したものと考える。

ただし、研究期間全体を通じて研究代表者は、『国富論』の独訳ないしはガルヴェの思想を経済思想史における「点」として位置づけようとするよりは、近代ドイツにおける思想史そのものの重層性、具体的には道徳哲学

の諸形態としてこれを解明することに力を尽くしてきた。近代社会論の分析が当初の計画を超えてはるかに多様化したことは、その帰結に他ならない。研究期間内に多くの思想家の著作を扱ってきたが、本研究の成果により、『国富論』の独訳を狭く経済思想史や経済学史といった直接関係する分野のみならず、18 世紀的学際的空間に位置づけ分析する必要があるという研究開始時の問題意識の正当性を証明し得たものと考える。

以下、公表しえた研究成果について個別に記す。

(1) ガルヴェの道徳哲学の初期形態について、アダム・ファーガスンの『道徳哲学綱要』の翻訳および「注釈」を中心に分析し、その独自性と全体像とを明らかにした。『綱要』はこれまでもしばしばヘーゲル研究やシラー研究において言及されてきたが、その翻訳の意義と実態には十分に光が当てられてこなかった。研究代表者は、『綱要』の翻訳に際してのガルヴェの忠実性を検証する従来の枠組みを逆転させ、彼の解釈と逸脱とに思想的独自性を見出すという手法を採用した。これによりファーガスンの道徳哲学はガルヴェによって大きく再構成され、「注釈」にみられるように、人間の主体性を強調する道徳哲学へと変貌したことが判明した。これはシラー研究において言われてきた若きシラーがガルヴェ訳から受けた感銘の所在を物語るものである。

(2) ガルヴェの『貧困論』およびその前提としてのマクファーラン『貧民研究』の独訳を分析することによって、ガルヴェの道徳哲学の方法的特殊性を提示するとともに、彼が把握しえた近代社会特有の貧困の諸原因について明らかにした。それによれば、商業社会および近代化の進展は貧困を解消するどころかその助長要因となっており、そこでは中下層階級、特に手工業者の零落が目立った。文明化が貧困を解消へと導かないという見方が 1780 年代のドイツにおいてすでに提起されていたことは、しばしばこの時期のドイツが後進国といわれることに鑑みて、ガルヴェの社会認識の先進性を示すものとして重要である。また 1790 年代の『国富論』独訳の直前にあって、ガルヴェが文明化に対して楽観的でなかったということは、『国富論』の翻訳と解釈に少なからず影響したと考えられる。『貧困論』には『国富論』への言及箇所が存在することから、すでにガルヴェは『国富論』を読み、その先進的商業社会像をある程度吸収しえていた。しかしながら『貧困論』全体において経済的自由主義的論調がまったく見られず、貧困救済に際して政府や自治体の積極的関与を説く記述が多いことを考えると、ガルヴェにおける『国富論』翻訳の動機もまた、単純なものではない。果たしてガルヴェは『国富論』を『国富論』として、つまり自由主義的観点を軸に読んだのだろうかという疑問点を解明するにあたって、『国富論』の独訳を精査するのに加えて、彼の近代社会論分析の有効性が立証されたものと考えられる。

(3) ガルヴェの近代社会論、道徳哲学については『綱要』や『貧困論』の他にも数点の著作を分析した。従来、ガルヴェはカントの論敵として扱われながらも、その対立点は必ずしも明確ではなかったが、ガルヴェは通俗哲学を啓蒙の実践的方法として肯定的に捉えており、それをカントの道徳哲学に対置することで、啓蒙を社会に浸透させようとする意図を強く持っていたことがより明らかになった。

(4) ガルヴェを窓口とした外国諸思想のドイツへの導入を『国富論』の翻訳を軸に検証するという当初の研究視角は、英仏啓蒙諸思想のドイツへの流入局面の把握という形で拡大されることによって、啓蒙絶対主義を思想史的に問うものまでに発展した。啓蒙絶対君主であったフリードリヒ大王の思想に着目する上で重要なのは、とりわけフランス啓蒙思想との接触局面であり、彼はそれらのいくつかを統治論や教育論として読み替えることによって現実に応用しようとしたのである。その意味では「理論と実践」という問題提起の仕方は、かなり早い段階でフリードリヒによって提出されていたと考えることもできる。重要なことは、フリードリヒもまたガルヴェと同じく、道徳哲学を実践的有効性の観点から評価していたことである。

以上の研究成果は数回にわたるヨーロッパへの渡航によって得られたものでもある。特に、パリにおいてヴァシェック教授との意見交換の機会に恵まれたこと、またユルゲン・シュトルツェンベルク教授の多大なる助力によりハレ大学での集中的な研究滞在を実現できたことは、本研究課題の視野拡大と深化に決定的に作用したことを付記しておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 大塚雄太「（書評）井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道』『社会思想史研究』35 号、164-168 ページ、2011 年、査読なし。

② 大塚雄太「ガルヴェとファーガスン―18 世紀ドイツにおける道徳哲学の解釈と深化の一形態」『社会思想史学会第 36 回大会報告集』、43-47 ページ、2011 年、査読

なし。

〔学会発表〕（計７件）

① 大塚雄太「ガルヴェとファーガスン―18世紀ドイツにおける道徳哲学の解釈と深化の一形態」、社会思想史学会第 36 回全国大会、2011.10.29、名古屋大学。
② 原田哲史・大塚雄太「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経済思想：啓蒙期ドイツの諸相―軍隊とジェンダーの視点から」（世話人）、社会思想史学会第 36 回全国大会、2011.10.30、名古屋大学・
③ 大塚雄太「通俗哲学としての道徳哲学―ガルヴェにおける理論と実践」、経済学史研究会第 212 回例会、2011.12.17、関西学院大学。
④ 大塚雄太「啓蒙絶対主義の思想像」、「野蛮と啓蒙」研究会、2012.12.22、京都学園大学。
⑤ 原田哲史・大塚雄太「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経済思想：19 世紀ドイツにおける国家・社会・労働」（世話人）、社会思想史学会第 37 回全国大会、2012.10.27、一橋大学。
⑥ 大塚雄太「ドイツ啓蒙と公共圏の思想」、大陸自由主義研究会、2013.2.23、明治大学。
⑦ 原田哲史・大塚雄太「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経済思想：19 世紀末葉のドイツにおける国家体制構想」（世話人）、社会思想史学会第 38 回全国大会、2013.10.27、関西学院大学。

〔図書〕（計１件）

① 田中秀夫編『野蛮と啓蒙―経済思想史からの接近』所収、大塚雄太「第 16 章：クリスティアン・ガルヴェの貧困論―文明化のなかの貧困と人間」、京都大学学術出版会、2014 年、521-550 ページ。

〔その他〕
ホームページ等
社会思想史学会第 36 回大会セッション報告
http://shst.jp/Convention/2011/M.pdf
社会思想史学会第 37 回大会セッション報告
http://shst.jp/Convention/2012/F.pdf
社会思想史学会第 38 回大会セッション報告
http://shst.jp/Convention/2013/G.docx

６．研究組織
(1)研究代表者
大塚　雄太（OTSUKA YUTA）
名古屋大学・高等研究院・特任助教
研究者番号：70547439